The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	三島文学の英語翻訳の高雅化 ： 『豊饒の海』『春の雪』を中心に
Author(s)	寺浦, 麻由
Citation	大阪大学言語文化学. 2022, 31, p. 83-101
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/87496
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

三島文学の英語翻訳の高雅化[1]

―『豊饒の海』『春の雪』を中心に―*

寺浦　麻由**

キーワード：英語翻訳、三島由紀夫、レトリック

Inherent in the translation of foreign literary works, the inevitable occurrence of ennoblement—the taking of source text and converting it into target text in a way that is more readable and rid of original complexity found in the source language—has been a widely-focused area of interest among scholars, translators and publishers alike over the years. Ennoblement was included in the scholar Antoine Berman's now-famous twelve deforming tendencies as a common consequence of translators trying to enhance the meaning intended by the author where necessary. Berman described source text as being 'raw material' that sometimes undergoes refinement and smoothing out of any original clumsiness in order to produce "elegant" sentences accessible to the target foreign audience. At the same time, academics have yet to settle on a uniform definition of ennoblement, which has only added to the complexity of research surrounding the translation of foreign literary works. This paper examines how ennoblement is played out in the English translation of *Spring Snow,* one of Mishima Yukio's last novels before he committed suicide at the age of 45. As is often the case with Mishima's writings in general, *Spring Snow* contained numerous play on words—intentional repetitions, metaphors and the like—that robbed the translator and the editors alike the ability to perform a mechanical, straightforward English translation of this Japanese masterpiece. Evidence uncovered by earlier research notes the many back-and-forths that took place behind the scenes as the *Spring Snow* commentators struggled to find the best way to interpret and convey Mishima's words for the English audience without committing any inadvertent ennoblement on their part. This paper will argue that ennoblement occurs in *Spring*

[1] 本論は寺浦（2020c）『言語文化共同研究プロジェクト 2019 レトリックとメディア』において執筆した論文「三島文学の英語翻訳における高雅化―『春の雪』の編集過程を鑑みて」に大幅な加筆修正を加えたものである。

* Ennoblement as Played Out in the English Translation of Mishima Yukio's *Spring Snow* (The First Book in *The Sea of Fertility* Tetralogy) (TERAURA Mayu)

** 大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程修了

Snow—as is often the case across many of Mishima's translations—in the following instances: (i) to better homogenize the rhetorics (e.g., repetitions and oxymorons) used in the story, (ii) to portray the characters in a more positive light and (iii) to refine the word choices and metaphors that would otherwise come out "funny" if translated verbatim into the target language. In so doing, this paper attempts to add to the growing body of research concerning the various causes for, as well as the definitive meaning of, ennoblement.

1 はじめに

アントニー・ベルマン (Antoine Berman) は粗野な原文を洗練された翻訳文へ書き換えることに注目し、高雅化と名付けた (Berman, 1998)。本稿では『豊饒の海』の第 1 巻『春の雪』の英語翻訳 *Spring Snow* (Michael Gallagher 訳) を対象とし、ST[2] と TT[3] を比べ高雅化の一端を探る。本稿では Larry (2015) で提供された編集過程に関する資料を利用し、先行研究で見落とされ、議論されていない箇所を補うことを目的とする。1 節で英語翻訳研究の問題点、理論枠組みについて紹介し、2 節では日本文学の翻訳の高雅化を概観し、3 節で編集過程での翻訳者のコメントも踏まえ分析を行う。4 節では ST と TT の差異などの分析結果をまとめ三島文学が高雅化される要因について報告する。本稿は乱立している高雅化の定義を目指すものではない。むしろ様々な定義の揺らぎが発生する理由の一端を後述の分析から明らかにすることが狙いである。

1.1『豊饒の海』『春の雪』に関する英語翻訳の先行研究

英語翻訳に関しては Keen (1972)、Ryan (1974) が翻訳の質を酷評しているが、本稿ではテクスト分析を行うことで高雅化という観点から ST と TT の差異を確認したい。ドナルド・キーンは、編集者から依頼された翻訳の校正を任され以下のようなコメントを残した。"The fact that Gallagher's translation seems so wordy, its worst fault, comes from the innumerable additions to the text, supposedly in the interest of assisting the Western reader" (Strauss, 1971 in Larry, 2015; 185) と、TT の拡大化を批判している。

寺浦（2020a）は『春の雪』の英訳版に挿入された百人一首 48、49 番、寺浦（2020b, 2021）で藻の表象を中心に考察した。しかし『春の雪』に関する網羅的な考察が足りない。Larry (2015) ではクノップフ社の翻訳者と編集者の書簡をまとめた。有益な資料が編纂されたがテクスト分析には紙面をさいていない。よって翻訳技法 (translation

[2] Source text: 起点テクスト（原文）
[3] Target text: 目標テクスト（翻訳文）

strategies) や歪曲傾向 (deforming tendencies) を同定し分析を行う必要がある。ST に潜む翻訳困難な箇所 SL・TL で好まれる表現についても分析した上で TT を精査したい。

1.2 理論的枠組み

本小節では理論的枠組みについて説明する。ベルマンは否定分析論において歪曲傾向 (deforming tendencies) を提唱した (Berman; ibid.)。その中でも高雅化という視点から英語翻訳を探る。高雅化とは以下のように定義されている。

> Rhetorization[4] consists in producing "elegant" sentences, while utilizing the source text, so to speak, as *raw material*. Thus the ennoblement is only a rewriting, a "stylistic exercise" based on—and at the expense of—the original. This procedure is active in the literary field, but also in the human sciences, where it produces texts that are "readable," "brilliant," rid of their original clumsiness and complexity so as to enhance the "meaning." (Berman, ibid.; 246)

高雅化は広義でぎこちないものを滑らかにし複雑なものをより洗練されたものにする文体練習を指す。そして狭義では、卑猥で皮肉を含む表現または口語性の高い表現をより均一的な表現に変換を指す。さらにベルマンは言語多様性に関しても言及し、ST における「口頭表現」(oral rhetoric) が破壊され雑然とした「多語性」(polylogy)[5] が破壊されることを批判した。Nida (1964) は曖昧さ、スラングを避ける過程で、翻訳者があまりにも直接的で複雑な法律文書さながらのメッセージを作り上げることになりかねないと懸念している。

2 日本文学英語翻訳の高雅化

本小節では高雅化の例を『春の雪』以外の日本文学英語翻訳から例示する。[6]

2.1『雪国』における高雅化

高雅化の典型例として言及されるのは『雪国』の次の部分である (Hasegawa, 2012)。

---

[4] ベルマンは散文の場合 "rhetorization"「修辞化」、詩の場合 "poetization"「詩的美化」とも呼称できると述べている (Berman, ibid.)。

[5] マンデイ（2009）は、"polylogy" を次のように解説している。精神医学用語では、多弁性 "talkativeness" や対話性 "dialogism" と同義で用いる場合もある。同一言語内の言語変種を指すこともある。『ドン・キホーテ』では、当時のスペイン語といっても、サンチョパンサの大衆的な慣用表現から、ドン・キホーテの騎士言葉まで用いられている。ベルマンは、このような言語多様性が TT では均一化されることに警鐘を鳴らしている。

[6] その他の詳しい高雅化の例に関しては寺浦（2020c）を参照されたい。

ST: もう三時間も前のこと、島村は退屈まぎれに左手の人差し指をいろいろに動かして眺めては、結局この指だけが、これから会いに行く女をなまなましく覚えている、はっきり思い出そうと焦ればあせるほど、つかみどころなく[7]ぼやけてゆく記憶の頼りなさのうちに、この指だけは女の感触で今も濡れていて、自分を遠くの女へ引き寄せるかのようだと、不思議に思いながら、鼻につけて匂いを嗅いでみたりしていたが、ふとその指で窓ガラスに線を引くと、そこに女の片眼がはっきりと浮き出たのだった。（川端, 1992; 7-8）

TT: I had been three hours earlier. In his boredom, Shimamura started at his left hand as the forefinger bent and unbent. Only this hand seemed to have a vital and immediate memory of the woman he was going to see. The more he tried to call up a clear picture of her, the more his memory failed him, the farther she faded away, leaving him nothing to catch and hold. In the midst of this uncertainty only the one hand, and in particular the forefinger, even now seemed damp from her touch, seemed to be pulling him back to her from afar. Taken with the strangeness of it, he brought the hand to his face, then quickly drew a line across the misted-over window. A woman's eye floated up before him. (Kawabata, 1983; 6-7)

翻訳者のサイデンステッカーは「指」から「手」への変更を加える他なかったと回顧した。これはSTの生々しさを詩的な表現へと変える高雅化である。

2.2『絹と明察』における高雅化

次に小説『絹と明察』から例示する。この作品では、駒沢紡績を率いる駒沢善次郎社長と従業員のストライキを描いている。近代的思想を持つ財政界の黒幕である岡野は、家父長制で従業員を子供のように守る駒沢と対照的な人物である。岡野は駒沢の愛人である菊乃の情報を元に経営者と労働者の間で手ぐすねを引き労働争議を引き起こす。菊乃は芸者から従業員寮の寮母に転身したため、駒沢紡績の情報を握っていた。翻訳者の佐藤（1996）は岡野の発言にみられる菊乃への女性蔑視を嫌悪している。

ST: 女にしては広い菊乃の額 (1) に、紅葉の紅い影がうつろうのを、自分のそそり立てた情感のせいだと思うのも億劫だが、今日あたりは嘘っぱちの恋人同士 (2) になっ

[7] 波線で示した「つかみどころなく」という表現との整合性を持たせるために、掴む部位である "hand" に変更したとも考えられる。

て、この女を抱き直し (3) てもいいような気がした（三島, 2006; 74）。

TT: That was an uninspiring thing to tell from his past. Okano felt too lazy to ascribe the red reflections of the maples on her brow, which was high for a woman, (1)to the emotions he kindled, but he felt he could again make love to her(3)today, pretending they were lovers(2). (Mishima, 1988; 54)

女性蔑視ととれる下線部１の表現に佐藤は憤慨した。下線部２の「嘘っぱち」に対して、「恋人のふりをして」という訳出がされ、皮肉を含んだ女性軽視の表現を緩和している。さらに、「抱き直す」という語彙も侮蔑的だが “again make love to her” と柔和な表現に書き直している。女性蔑視する男性の口ぶりは卑劣な人間性を表す指標となる。しかし女性を軽視した男性の口語性 (orality) が均一化された TT には高雅化が働いているといえる。

以下にベルマンによる表現や例示を手掛かりに、高雅化についての定義を簡略化した。抽象的な定義に起因し研究者によってその定義が異なり幅広い事柄を含めている。

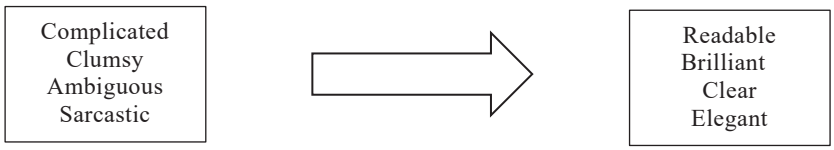

図１　高雅化の曖昧な定義

3『春の雪』の高雅化

分析に移る前に『春の雪』のあらすじを紹介したい。本作では大正時代に急成長した地方出身武士の息子の清顕と公家である綾蔵伯爵家の美貌の令嬢、聡子の悲恋を描いている。清顕は、堂上華族の有する礼儀を身につけるため、幼少期に綾倉家に預けられた。綾倉家で教育されてきた清顕は年上の聡子に恋心を抱く。しかし清顕は聡子の余裕ぶった態度、真の優雅を嫌悪していた。聡子も清顕への思慕を抱き続けていたが、その想いを秘めたまま、思わせぶりな行動で清顕を不安に陥れる。ある春の朝、聡子は清顕を雪見に誘う。そして、その幌の中で初めて接吻を交わす。この雪見を契機に想いを告げた二人は秘密の逢引を始める。二十歳を過ぎても清顕のために縁談を断っていた聡子に宮家との婚姻勅許が下る。一度は聡子を手放すものの「不可能の恋人」と化した聡子を手に入れたいと決断した清顕はまたもや禁断の逢瀬を重ねる。ついに清顕の子を身ごもっ

てしまった聡子は堕胎し出家することになる。清顕は、聡子が隠遁する寺を訪れ雪の中待ち続けたために命を落とす。

3.1 分析の方法

本小節では清顕と聡子が初めて接吻を交す 12 章、27 章の ST・TT（230）の差異を中心に分析する。そして Larry (2015) におけるクノップフ社編集者の訂正、校閲者 Iwasaki Haruko、翻訳者のコメントを引用し、その翻訳過程について言及する。なお校閲者 Iwasaki 氏は「正しくない」箇所に “n.c” (not correct)「原文にない」箇所に “n.o” (not in original) と記載した。編集者、翻訳者のコメントが現存するテクストの分析を行うことで、高雅化がどのタイミングで生じたかについても考察したい。以下に記号の意味を示した。

表 1　記号の説明

TT. G (Gallagher)	翻訳者マイケル・ギャラガーによる翻訳
TT. E (Editor)	アルフレッド・クノップ社の編集者による編集が施された翻訳
TT. I (Iwasaki)	Iwasaki Haruko 氏の編集が施された翻訳
TT	出版された翻訳文

前述したように高雅化の定義は曖昧で研究者によってその認識が異なる。筆者は高雅化の根拠を示しその混乱を避けたい。必要に応じて高雅化と同時に生じている 12 の歪曲傾向 (Berman, ibid.)、翻訳技法を同定する。

3.2 分析

『春の雪』の考察にうつる。まず簡単に高雅化の例を挙げる。聡子付きの侍女、蓼科は聡子の妊娠が発覚した時、危機感よりも聡子を管理下に置ける喜びを感じた。蓼科は聡子の初潮、健康状態をすべて管理していた。綾倉家を守るためなら自殺をも厭わない老人は次のように描写されている。「かつて聡子の初潮のとき、いちはやく気づいて相談に乗ったように、蓼科はいわば、手ごたえのたしかな血まみれなものの専門家だった。」（324）が、TT では “Just as she had been prompt to notice and advise Satoko years before when she began to menstruate, so now she showed herself a practiced specialist in all things physical”（265）と翻訳された。直訳すれば、「手応えが確かなものの熟練した専門家」と翻訳されている。その行動の大胆さに周りは恐怖さえ抱いているのだ。「血まみれ」は恐怖を喚起する表現だが TT では削除されている。こうした高雅化は些細な変

化といえるが、後述する高雅化は登場人物の印象に関わる。

（1）聡子の身体描写[8]

清顕は突然聡子に誘われて雪見に向かう。雪見の幌に乗り込む際の聡子の身体描写がTTでは異なる。以下は翻訳者による女性の美化であり典型的な高雅化といえる。

ST: [1] 乗るときの勢いで、聡子の頬は清顕の頬のすぐ近くまで来すぎ、あわてて身を立て直した彼女の瞬間の<u>頸筋の強ばり</u>(1) がよくわかった。[2] それが<u>白い水鳥の首のしこり</u>(2) のようだった。（110）

TT: [1]As Satoko got into the rickshaw, her momentum carried her cheek close to Kiyoaki's for a second, and when she pulled her head back, disconcerted, to straighten up, Kiyoaki was caught by <u>the supple strength of her neck</u>(1).[2]It made him think of <u>the smooth, white neck of a swan</u>.(2) (86)

直喩の媒体「しこり」は聡子に不似合いなため削除された。TTでは「滑らかで白鳥の首を思わせる（拙訳）」と聡子の優雅な人物像を固守した。ST下線部（1）「頸筋の強ばり」は「水鳥の首のしこり」に喩えられている。聡子が清顕に接近しないよう身を正す女性としての自尊心が「しこり」の一語に象徴される。しかしTT下線部（1）に示したように、形容詞 “supple” でフェミニンな女性像を形成している。さらにTT下線部（2）では、むしろ “tense” と翻訳すべきところ “smooth” を用いた。これでは聡子が身を正して硬直した前文 “As Satoko got into the rickshaw, her momentum carried her cheek close to Kiyoaki's for a second, and when she pulled her head back, disconcerted, to straighten up, ...” との整合性がとれない。余裕ぶった聡子が身を強張らせることに意外性があり、覆い隠せなかった聡子の緊張が「強ばり」「しこり」に象徴されている。それを全くの反義語で訳出することは高雅化と呼称できる。また上位語 (superordinate)「水鳥」が必ずしもその下位語 (hyponym) の一つである “swan”「白鳥」とは限らない。しかし翻訳者の判断で、白い水鳥の中でも美しさを喚起する白鳥が選択された。

第42章の清顕と最後の別れを告げる場面での聡子は「白鳥」(383) に喩えられている。よって翻訳者は第42章との一貫性を目指した可能性もある。曖昧さを嫌うTLで包括的な語句 “waterfowl” を用いることによって、この直喩を不自然にする可能性があった

[8] (1) に対しコメントは存在しないが高雅化の一例であるため取り上げる。

だろう。

さて「水鳥」「しこり」という語彙をなぜ使用したのだろうか。三島は音韻効果を優先させるため「り音」の含まれる “mizudori,” “shikori” を使用したのではないだろうか。なぜなら（1）の ST わずか三文に「り音」が 8 回認められるからである。流音「り」音の同音反復を利用し 12 章全体に流れる降雪と馬車のリズムを模倣したと考えられる。[9]

（2）美しさ

接吻をした清顕はなにもかも忘れ歓喜すべき状況においても自分の美しさを忘れていなかった。TT では男性の清顕に対し “beauty” ではなく “good looks” を使用したことが問題となっている。第 1 章からも次のように頑なに “beautiful” を使わない姿勢が感じられる―「十三歳の清顕は美しすぎた」（14）“At thirteen, Kiyoaki was altogether too handsome”（10）。

ST: そのとき清顕はたしかに忘我を知ったが、さりとて自分の美しさ (1) を忘れていたわけではない。自分の美しさ (2) と聡子の美しさ (3) が公平に等しなみに眺められる地点からは、きっとこのとき互いの美が水銀のように融け合うのが見られたにちがいない…（113）。

TT.G: Kiyoaki at that moment, though plunged into self-forgetfulness, was still keenly aware of his own beauty (1): His beauty (2) and Satoko’s beauty (3): he saw that precisely this fine correspondence between the two dissolved all constraint and allowed them to run together.... (Larry, 2015; 189)

TT: At that instant, although totally engrossed, he was still keenly aware of his own good looks (1) Satoko’s beauty (2) and his (3) : he saw that it was precisely this fine correspondence between the two that dissolved all constraint and allowed them to flow together, merging as easily as measures of quicksilver. (88)

ギャラガーはクノップ社に対する書簡に ST を手書きで写し、「美しさ」という言葉

[9] ST の語尾音 < り > の連続が TT で “straighten,”“supple,”“strength,”“smooth,”“swan” という語頭音 <s> の連続に形式的に等価されている可能性がある。これも “waterfowl” では訳出不足で、“swan” しか考えられない理由である。

を四角く囲み、三回反復されることを強調した。そして反復法 (repetition) が TT でも同様に再現されるべきだったと主張した。ここで “beautiful” “good looking” の定義を確認したい。*Longman Language Activator* には BEAUTIFUL という大項目が見つかる。大項目の下位区分のなかには、美しいを用いる時に〈子供〉〈もの〉に使用する場合のニュアンスを解説している。〈WOMAN〉の項目には “beautiful use this about a woman who is extremely attractive in a way that is fairly unusual and special, so that people notice and admire her.”〈MAN の項目には下位区分 “good looking” はあるが “beautiful” は記載されていない。 “good looking” は “use this about a man who is nice to look at but in a fairly ordinary way.” と男性に用いることが示されている。“good looking” と “beautiful” における *Oxford English Dictionary* (*OED*)、『新英和大辞典』、『ジーニアス英和辞典』の定義を以下の表にまとめた。

表 2　good looking と beautiful の意味比較

辞書	good looking	beautiful
OED	Of a person: of good or pleasing appearance; (now usually) physically attractive, esp. having a beautiful face. Cf. well-looking adj. 1	b. spec. Of a person (now esp. a woman), the face, figure, etc.: possessing attractive harmony of features, figure, or complexion; exceptionally graceful, elegant, or charming in appearance
新英和大辞典	1a 器量 [顔立ち] のよい、美しい、美形の 1b 善良 [有徳] そうな	1 美しい、美麗な、きれいな〈cf. pretty〉
ジーニアス英和辞典	〈人が〉顔立ちのよい、美しい ;〈男が〉ハンサムな《◆ beautiful よりは劣る》	1. 美しい , きれいな ;（心・感覚などを）楽しませる

OED の “beautiful” は特に女性に用いられることが明記されジーニアスの “good-looking” の項には、ハンサムな男の容姿を修飾することが記載されている。[10] 目標志向的な編集者が校閲段階で辞書的な意味を優先させ “good looks” を用いたと考えられる。ギャラガーは編集社にあてた手紙に “If Mishima meant good looks, he would have

[10] *OED* 4b.Of a person (occasionally an animal): attractive and pleasing in appearance, esp. in having a well-proportioned figure and noble bearing; (now) spec. (of a woman) striking, stately, as opposed to conventionally beautiful or pretty; (of a man) good-looking. Also, of the face, figure, etc. という定義を見れば “handsome” は女性にも使用されていたことがわかる。1855 W. M. Thackeray Rose & Ring xvii. 129 She is very pretty, but not so extraordinarily handsome. など。

written good looks and not beauty. Why was this insane substitution made? A reluctance to assign beauty to a male? Or a desire to avoid repetition-that great Knopf Bugaboo? Well, for anyone who has any sense of sentence rhythm, it's obvious that the repetition is for effect. And it's in Japanese" (Larry, 2015; 189) と不満をしたためた。『金閣寺』の英語翻訳でも同様の問題が立ち上がったが、男性主人公には "handsome" を用いていた。

注目すべきは、ギャラガーが反復法に注目し ST の音韻効果を残そうとしたことだ。前田（2006）は翻訳において ST で同一のものを指す名詞を何度も使っている場合 TT では言い換えることがあると述べた。しかしその傾向に抗い、起点志向で翻訳に挑もうとしている。ここでは翻訳者ではなく、編集者が ST にあった「不自然さ」を緩和して高雅化したことがわかる。

ST では流動的で光沢のある元素が難なく融解するように、お互いの美が一体となる。同質の物質が融解するメタファーの性質上、水銀に喩えられた清顕、聡子の美に同様の "beauty" という語彙が使用されるべきである。

（3）聡子の化粧　暗い照り

清顕は薄暗い幌の中で聡子を眺める。聡子の唇が暗く照り輝いて見える。

ST: 京紅の唇だけが暗い照りを示して、顔は、丁度爪先で弾いた花が揺れるように、輪郭を乱して揺れていた。（112-113）

TT.G: Her makeup was as tasteful as ever, her lips a subdued crimson in the shadow. And because of the swaying rickshaw, her features, like the details of a blossom held between trembling thumb and forefinger, were softly indistinct. (Larry, 2015; 189)

TT.I: Her makeup was as tasteful as ever (Not in O), her lips a subdued crimson in the shadow. And because of the swaying rickshaw, her lips a subdued crimson in the shadow, And because of the swaying rickshaw, her features, like ~~the details of~~ a blossom trembling thumb and forefinger (at a playful fingertip), were softly indistinct. (Larry, 2015; 189)

TT: Kiyoaki stared at the face with its closed lids; only the subdued crimson of her lips glowed in the shadows, and because of the swaying of the rickshaw, her features, like a flower held between trembling fingertips, were softly blurred. (88)

TT. I [1] 網掛け部分に対して Iwasaki 氏は “Gallagher’s invention Not in O” と書いた (Larry, 2015; 189)。網掛け部分を逆訳すると「彼女の化粧は今までにないほど、趣があった。（拙訳）」となる。聡子の口紅が示した「暗い照り」は撞着語法である。「反対物の一致」（瀬戸, 2002）と呼ばれる技法を用い闇と光の攻防を感じさせるようなレトリックで京紅を描写している。しかし下線部（1）の「暗い」〈形〉、「照り」〈名〉は、TT では「暗闇の中で光る」glowed〈動〉＋ in the shadow〈前置詞句〉へと変更された。こうした翻訳技法は文構造を TL において自然に変換する調整 (modulation) (Vinay, J.-P.&Darbelnet, J., 1995) にあたる。

（4）幌の描写

清顕は遊女と関係を持ったと嘘をつき、聡子も所詮数多の女の一人だと侮蔑した手紙を出す。雪見の時点で、聡子がその手紙を読んだか定かではない。清顕の緊張は幌の揺れとともに増幅する。手紙を読んでいないのであれば聡子は清顕のことを「女を知らない男として嬲っているのではないか」（112）という疑念に駆られる。

ST: [1] 黒い小さな四角い闇の動揺 (1) は、彼の考えをあちこちに飛び散らせ、聡子から目をそむけていようにも、明かり窓の小さな黄ばんだセルロイドを占める雪のほかには、目の向けどころがなかった。[2] 彼はとうとう手を膝掛けの下へ入れた。[3] そこでは、温かい巣の中で待っていた狡さ (2) をこめて、聡子の手が待っていた。（112）

TT: [1]Kiyoaki’s thoughts twisted and turned as he sat in the small, dark, square confines (1) of the swaying rickshaw.[2]Since he would not look at Satoko, there was nothing else to do but stare out at the snow, flashing brightly through the narrow window of yellow celluloid.[3]Finally, however, he put his hand under the blanket, where Satoko’s was waiting, already in possession of the one warm, narrow refuge available. (2) (88)

（4-1）黒い小さな四角い闇の動揺

下線部 1 幌の振動を指す「黒い小さな四角い闇の動揺」において形容詞「黒い」は削除され名詞「闇」は “confine” を “small” と “square” とで並列して修飾する “dark” という形容詞になっている。ST の「黒い」「闇」は冗長的だと判断されたのか “dark”、一語に集約されている。翻訳者は ST「黒い」「暗い」の言語使用を作家のこだわりだと判断し忠実に準拠した。しかし編集者に校正されてしまったと述懐した (Larry, ibid; 275)。

これは冗長語を整理する高雅化だといえる。また品詞を変える技法である調整(modulation) (Vinay, J.-P.&Darbelnet, J., 1995) の翻訳技法が用いられた。

(4-2) 温かい巣の中で待っていた狡さ

ST[3]「そこでは、温かい巣の中で待っていた狡さをこめて聡子の手が待っていた。」はTT[3] で同様の隠喩という形式を採用したが "already in possession of the one warm, narrow refuge available." になっている。逆訳すれば「すでに、恰好の暖かく狭く隠れ家を用意していた。」となる。平然とした聡子を「狡い」と訝る清顕の心情は訳出されていない。つまり清顕の神経質な妄想は削除されている。この変更は聡子の性格を美化し、さらには清顕の誇大妄想が凡庸化されてしまう高雅化といえる。

三島文学の翻訳者ベスタ（1990）は英語に翻訳した場合に滑稽になるメタファーが多いことに言及した。ギャラガーも彼のように「巣」を訳出した場合の滑稽さを恐れた可能性がある。しかし（1）で言及した「白い水鳥のしこり」(110) から水鳥のメタファーが継続し、巣で白い水鳥が羽を休めているように、膝掛けの中で白い聡子のなめらかな手が待っていたと考えられる。よってSTのメタファーによる言語体系性がTTで破壊されたことになる。

(5) 聡子の手紙

聡子から雪見の喜びをしたためた手紙が届く。優雅を残しながらも見事に織り込まれた官能的な表現に、自らの稚拙な優雅との差を思い知らされる清顕であった。手紙は、優雅が淫らさを凌駕することを記載した教本のようだった。

ST: 読みおわったときは、読む者を有頂天にさせる手紙だと思われたが、しばらくしてみると、彼女の優雅の学校の教科書のような気がしだした。聡子は清顕に、真の優雅は<u>どんなみだらさをも怖れないということ</u>を教えているように思われたのである。(140)

TT. G: When he had reflected a bit, however, Kiyoaki's mood altered. He now felt that the letter was a sort of text meant to spur his education in Satoko's school of elegance. Her intention, he thought, was to give him an object lesson that <u>true elegance knows no shame, however compromising the circumstances</u>. (Larry, ibid; 190)

TT. I: When he had reflected a bit, however, Kiyoaki's mood altered. He now felt that the letter was a sort of text meant to spur his education in Satoko's school of elegance. Her intention, he thought, was to give him an object lesson that true elegance（knows no shame, however ~~compromising the circumstances~~.（n.c）（dares any wantonness）（Larry, ibid; 190）

TT. E: On reflection, however, it seemed more of a textbook exercise from Satoko's classes in the art of elegance. He felt she wanted to teach and that such an art overrides any question of decency.

TT: After he had read it, his immediate reaction was that it was the kind of letter that ought to transport a man into ecstasy. On reflection, however, it seemed more of a textbook exercise from Satoko's classes in the art of elegance. He felt she wanted to teach him that elegance overrides any question of indecency. (109)

ギャラガーは「みだらさ」を訳出するのを避け「真の優雅は恥を知らないがどんな状況をも和解させる」と訳した。Iwasaki 氏は括弧内に正しくない (not correct, n.c.) と表記し、TT. I「どんなみだらさも、ものともしない」と修正している。さらに TT. E では「この教義は良識に関するどんな問題をも無碍にする」、TT では、「優雅は、どんな淫らさに関する問題をも無碍にする」と変更された。ギャラガーが訳出しなかった ST の「みだらさ」という語彙は「洗練された」TT で不都合を引き起こすため、当初は削除されていたことは注目に値する。よってギャラガーが施した高雅化を校閲者が訂正したことがわかる。

（6）聡子の腿

第 27 章で聡子は清顕に見初められる。清顕は、聡子の着物の裾から垣間見えた腿を曙の一線に重ねる。編集段階で TT. G「聡子の腿、それは暁の地平線の仄かな一線のように今こそ光り」から TT「仄暗い地平線の微かな輝きを有する聡子の腿」と編集された。下記引用箇所の直前、清顕は聡子をみそめれば、悲しみの世界を脱し「完全無欠な曙が漲る」（230）はずだと期待している。

ST: ようやく白い曙の一線のように見えそめた聡子の腿に、清顕の体が近づいたときに、聡子の手が、やさしく下りてきてそれを支えた。この恵みが仇になって、彼は曙

の一線にさえ、触れるか触れぬかに終わってしまった。(233)

TT. G: Finally, however at the time that Kiyoaki's body was drawing it closer to Satoko's, whose thighs now glowed like the pale line of the dawn horizon, when she raised her hands and gently supported him, an unfortunate reaction. For just at a point when he was not sure whether he had merged himself with the dawn or not, all of Kiyoaki's effort came to an abrupt conclusion. (Larry, ibid.; 284)

TT: Finally, however, he was drawing closer to her body, slowly lowering himself onto her thighs, which had the faint sheen of a pale dawn horizon, when she raised her hands and gently helped him; this intended kindness ruined the moment, for at the instant when he merged with the dawn, whether he was touching her or not, it all ended abruptly. (190)

ギャラガーは "The Japanese says "misomeru" , "beginning to be seen, " which is, I think, a pivot adjective that looks back to the dawn and looks ahead to Satoko's legs" (Larry, ibid; 284) と「見えそめる」について言及している。下線部 "pivot adjective" とはどういう意味だろうか。「見えそめた」のは曙という媒体 (vehicle)、そしてその主意 (tenor) である聡子の腿でもある。よって "pivot adjective" は一種の「中心軸のある形容詞」である。ギャラガーは「見えそめた」を中心軸として前後を眺める軸回転のイメージで捉えている。[11] 字義通りに翻訳すれば "Like the white line of the dawn beginning-to-be-seen Satoko's thighs" となると主張した。ST 同様 "beginning-to-be-seen" を中心軸として曙の一線と聡子の腿両者を前後に修飾する文構造で訳せば、媒体と主旨を滑らかに繋ぐ "pivot adjective" が再現できるのだ。

ST では主体の「見る」知覚行為を削除しているため "pivot adjective" は消滅している。直喩を隠喩的に訳し、下線部 1 のような関係代名詞で "her thighs" を修飾した。(6) は唐突なメタファーの複雑さを TT で緩和する高雅化だと考えられる。ギャラガーは ST の複雑さを TT に移植しようとしていた。ST の直喩の複雑さを凡庸化したのは編集者といえる。

[11] 大森文子教授に解釈のご教示をいただいた。

4 結論

4.1 登場人物の高雅化に関する分析結果

本小節では分析結果を下記の表にまとめた。特に清顕と聡子の感情表現にどのような差異が認められるかに注目すると、その差は小さいとは言えない。本作では清顕の屈折した自尊心と、聡子の強固な優雅の狭間にある緊張関係が特徴的である。二人の恋は一般的な男女の熱愛とは言い難い。その心象を表すレトリックの機微は高雅化を伴って変更された部分もあった。また、高雅化を施したのが編集者である場合と翻訳者である場合があることが明らかになった。

表 2　ST・TT の表現と高雅化の要因

番号	ST の表現 / 特徴	TT の表現 / 特徴	高雅化の要因
(1) 聡子の身体描写	白い水鳥のしこり / 首のこわばりを表す	the smooth, white neck of a swan. / 滑らかさを表す	聡子のイメージに不似合いな語の使用
(2) 美しさ	美しさ / 男性主人公の清顕に対して美しさを使用、反復法	good looking, good looks / 男性を形容する際のより一般的な語の使用、同一語を繰り返さない	男性を形容する語彙の不自然さ、反復法を避けるため
(3) 聡子の化粧	暗い照り / 撞着語法	glowed in the shadow / 論理的な表現に変更	不自然な語彙
(4－1) 幌の描写	黒い、小さな、四角い闇 / 冗長な語彙	the small, dark, square confines /「黒い」を削除、調整	冗長な語彙
(4－2) 温かい巣の中で待っていた狡さ	温かい巣の中で待っていた狡さを込めて / 水鳥のメタファーの継続、清顕の妄想	already in possession of the one warm, narrow refuge available. /「巣」「狡さ」を削除	複雑なメタファー
(5) 聡子の手紙	どんなみだらさをも怖れない / 聡子に対し「みだらさ」という語彙を使用	compromise the circumstances /「みだらさ」という語彙の削除（編集段階で変更）	聡子のイメージに不似合いな語の使用
(6) 聡子の腿	ようやく白い曙の一線のように見えそめた聡子の腿 /「見えそめた」という “pivot adjective” の使用	her thighs, which had the faint sheen of a pale dawn horizon whose thighs now glowed like the pale line of the dawn horizon / “pivot adjective” の消滅	複雑なメタファー

(1)(4-2)(5)では高雅化が聡子の人物像の解釈にまで影響を及ぼしている。さらに(1)の場合TTから聡子の緊張が削除された。又、(4-2)では聡子の狡猾さが伝わらない。(5)では翻訳者は女性主人公のイメージを柔和にとどめていた。佐藤（ibid.）が行った女性蔑視を是正する高雅化とは性質が異なるものの、女性登場人物を美化する傾向が『春の雪』にも認められた。ベスタ（ibid.）が唐突なメタファーを訳した際に英語だと滑稽に聞こえる場合があると述べたが、(1)（4-2）は直訳すると滑稽になるかもしれない。さらに(1)(4-2)(5)(6)に関しては聡子に対する清顕の心情が高雅化の過程で柔和になっている。

聡子のイメージに不似合いな語に関してはさらに細かく分類することができるだろう。翻訳作品では不都合な箇所が省かれることがしばしばある (Larry, 2015)。(1）は容姿、(4-2）は性格、(5）はおしとやかな女性像に不似合いな語である。TTにおいて聡子は、完全無欠で、淫らさや狡猾さとは無縁の女性である。STで聡子を描写する微妙なレトリックは、純情とは裏腹の強さやを示していた。TTではこれらの描写が再現されていないことが批判の所以かもしれない。

4.2 高雅化についてのまとめ

ここで改めて高雅化について考えたい。以下の3つの過程により、高雅化が起こることがわかった。

(1) 三島のレトリック表現（反復法、撞着語法、冗長語）をより均一化する過程

三島のレトリックは唐突で理解しにくい。「暗い照り」などの撞着語法、「美しさ」という語彙の反復法など、英語に直すと必然的に “wordy” (Keene, ibid.) となる。

(2) 登場人物の肯定的なイメージを維持しようとする過程

聡子のイメージを肯定的に保つため、審美的に劣る表現は削除された。TTでは粗野な要素を排除し洗練された女主人公を作り上げている。男性主人公である清顕に、女性的な形容が用いられている場合に、より男性的な表現に書き換えている部分もみられた。

この高雅化の要因に関しては、前述した清顕の心情（5）にヒントが隠されている。引用（5）における「真の優雅は、どんな猥褻な表現も恐れない」という気づきは三島の文章にも当てはまる。[12] 淫らな表現であっても王朝文学の優雅と対となれば、もろとも雅な表現に変わるのである。本作では日本古来の藻の表象と淫らさが対となり、テクストには古典世界の伝統を想起させる優雅さが漂っていた（寺浦, 2020b, 2021)。例えば2人の初夜を描写した次の文章をみてみよう。

---

[12] 大森文子教授に高雅化の一因を示唆していただきました。

ST: 清顕の若さは一つの死からたちまちよみがえり、今度は聡子のなだらかな受容の橇に乗った。彼は女に導かれるときに、こんなにも難路が消えて、なごやかな風光がひろがるのをはじめて覚った。暑さのあまり、清顕はすでに着ているものを脱ぎ捨てていた。そこで肉のたしかさは、水と藻の抵抗を押して進む藻刈舟の舟足のように、的確に感じられた。清顕は、聡子の顔が何の苦痛も浮かべず、微光のさすような、あるかなきかの微笑みを示しているのさえ訝らなかった。彼の心にはあらゆる疑惑が消えた。」(234)

TT: “Under her sure, feminine guidance, he sensed that for the first time every barrier was gone and that he had found himself in a rich new world. In the heat of the room he had already stripped off the last of his clothes and now he felt the immediacy of flesh on flesh, firm but yielding, with the resistance of water and clinging plants to the advancing prow of a boat. He saw that there was no trace of distress in her face. She was even smiling completely at rest. (191)

翻訳文においては藻の優雅なレトリック（下線）の助けがないために、TT を大幅に改変する必要性がある。文化差異上、藻を表象とする重層的な意味を含有する王朝語（藻刈舟など）は英語では訳出するのが難しい。よって、翻訳困難な藻の描写を削除した場合、テクストにはただの淫らさしか残らないのだ。その不都合を是正するため、TT に残る淫らさを排除し、柔和な表現に書き換える必要がある。翻訳文でも官能的な表現に添える王朝語の美を訳出できれば、淫らな表現も王朝語に助けられ雅の中に収まる。いわば古典の和歌を本歌取りした三島の文は、日本古来の和歌感を根幹とした優雅を有しており淫らさを恐れない。しかし TL の文化背景が違うため淫らさが前面に出ないよう配慮する必要がある。そして、その配慮の過程で高雅化が起こる可能性があると考えられる。

(3) 複雑なメタファーを、より「洗練された」英語に訳す過程

(4-2) では「巣」という語彙が複雑で、読みの程度によっては、前から続く水鳥のメタファーの延長だと気づきにくい。複雑なメタファーを見逃しやすく、一見文脈上無関係と思われる語を削除してしまう場合がある。

しかしベスタ（1990）のように、小説の構造を把握し無駄な記号表現は一つもないと信じる翻訳者であれば、一見唐突に見える語彙を削除することはないだろう。

ここまで翻訳の編集過程も交えながら ST・TT 間の差異を分析した。また高雅化の要因、編集過程を探ることで翻訳者への一方的な批判を是正することができた。

引用文献

川端康成（1992）.『雪国』新潮社.（出版年は 1957 年）.

Kawabata. Y. (1983). *Snow Country*. Seidensticker, E. (Trans.) Tokyo: Tuttle Company, (Original work published 1957).

三島由紀夫（2012）.『春の雪』新潮社.（出版年は 1969 年）.

Mishima, Y. (1990). *Spring Snow*. Gallagher, M. (Trans.). New York: Alfred A Knopf, Inc. （Original work published 1972）.

三島由紀夫（2006）.『絹と明察』新潮社.（出版年は 1964 年）.

Mishima, Y. (1988). Gibney, F. (Ed.) *Silk and Insight*: A Novel. M. E. Sharpe. Sato, H (Trans.) Frank Gibney (Ed.) New York, An East Gate Book. (Original work published 1964).

参考文献

Berman, A. (1985/2000). *Translation and the traials of the foreign,* (Trans.) Lawrence Venuti. In *The Translating Studies Reader*, ed. Lawrence Venuti, pp.284-297. London. Routledge.

Hasegawa, Y. (2012). *The Routledge Course in Japanese Translation*. London. New York. Routledge.

Keene, D. (1972). Mishima's Monument to a Distant Japan, *The Saturday Review*, pp. 57-59. (June. 10, 1972).

Larry, W. (2015). Unbinding the Japanese Novel in English Translation, The Alfred A. Knopf Program, 1955-1977. Department of Modern Languages Faculty of Arts University of Helsinki.

Morris, I. (1958). Personal correspondence to Harold Strauss. 7 July 1955. In Larry, W (2005). Unbinding the Japanese Novel in English.

Nida, E. (1964). *Toward a Science of Translating*. New York: Prentice Hall.

Ryan, M. (1974). "The Mishima Tetralogy" (Review) *Journal of Japanese Studies*.1(1). pp. 65-73.

Strauss, H. (1971). Personal correspondence to Michael Gallagher. 8 Jan. 1971.In Larry2015, 185.

Venuti, L. (1998). *The Scandals of Translation: Towards an ethics of difference*, London and New York: Routledge.

Vinay, J.-P. & Darbelent, J. (1958/1995). Comparative Stylistics of French and English. A

Methodology for Translation, Juan Sager and M. J. Hamel. Amsterdam John Benjamins L. Venuti, in (Ed.) *The Translation Studies Reader* 3rd ed. pp. 84-93.

キーン・ドナルド（2012）.『ドナルド・キーン著作集 4 巻思い出の作家たち』新潮社.

佐藤紘彰（1996）.『訳せないもの』サイマル出版会.

瀬戸賢一（2002）.『日本語のレトリック文章表現の技法』岩波書店.

寺浦麻由（2020a）.『豊饒の海』『春の雪』の英語翻訳－百人一首 48 番 49 番の訳出について－』『大阪大学言語文化学』29. 大阪大学言語文化学会. pp. 57-74.

寺浦麻由（2020b）.「英訳版「春の雪」における表面下の意味ネットワークの破壊－「藻」の表象を中心に－」4.『言語文化研究』言語文化研究所. pp. 49-65.

寺浦麻由（2020c）.「三島文学の英語翻訳における高雅化―『春の雪』の編集過程を鑑みて」『言語文化共同研究プロジェクト 2019 レトリックとメディア』pp. 71-84.

寺浦麻由（2021）.「 英訳版『春の雪』における表面下の意味ネットワークの破壊「藻」の表象を中心に－（2）」5.『言語文化研究』言語文化研究所. pp. 53-75.

ベスター, ジョン（1990）.「没後 20 年三島由紀夫特集翻訳者の立場から」『新潮』87, (12), 新潮社. pp. 239-242.

ベルマン, アントニー（1984/2008）.『他者という試練：ロマン主義ドイツの文化と翻訳』（藤田省一訳）. みすず書房.

前田尚作（2006）.『日本文学英訳分析セミナー』昭和堂.

マンデイ, ジェレミー（2009）.『翻訳学入門』（鳥飼玖美子監訳）. みすず書房

辞書類

増田剛（編）（2013）.『新英和大辞典』研究社.

南出康世（編）（2001）.『ジーニアス大辞典第三版』大修館書店.

Addison. W. L. (2013). *Longman Language Activator*. Longman.

Oxford English Dictionary (http://www.oed.com).